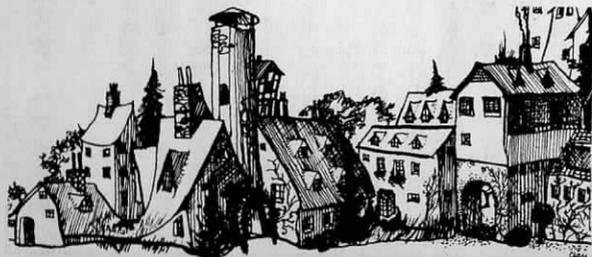


コミュニティの基礎

四つの変革ゲリー・スナイダー

五〇年代後半から六〇年代のアメリカの、アンダーグラウンド文化形成に大きな影響を与えた一人にこの筆者がいる。大学で言語学や人類学について学び、中国語の知識をもって寒山の詩を訳した。詩集に「わりぐり」、「神話と本文」、「裏の国」があり、評論集に「大地の家の支え」がある。木こり、森林監視人、船員など経歴。
一九五八年にはじめて日本に来てから、総計一〇年ほど滞在、大徳寺で参禅した。ビートの生活を小説に書いた、ジャックケラワツクの「ダルマ行者たち」の主人公、ジャファイ・ライダーのモデルと言われる。

(以上筑摩書房刊「アメリカの革命」の紹介より抄出。)



変革の1

生活条件

立場 人間は生命のつづれおりの一部にすぎない——勿論、その存在自体がつづれおり全体に依拠しているし、全体に対して責任も負っている。最も高度に発達した、道具を使う動物として、他の生命のかたちがくり抜ける未知の運命が尊重されるべきことを知らねばならない。そして、生命の地球共同社会へのやさしい奉仕人として行為しなくてはならない。

状態 今は人間が多すぎるし、問題は急速に深刻化している。人類にとつてのみでなく、他の生命のかたちにとつても潜在的な脅威である。

目標 目標は現在の人口の半数か、それ以下であろう。

行動

社会／政治的 堕胎の合法化。避妊手術の奨励——診料所で無料であるべきこと。特定の収入額以上で二人以上の子持

ちに対して収入免税を撤回する。収入額査定にあたって、低収入家族も気をつけざるをえないようにはかること。カトリック教会、その他の組織がこの問題に関して無責任な政治的圧力を行使しないようきっぱりした立場をとること。

すべての政治的問題が、この根本的問題に照らして理解され、解決されるように絶えずなく働きかけること。

共同体 他の社会構成あるいは結婚形態を考へること。たとえば集団婚や一妻多夫など、家族生活は維持されるが子供の数は少なくなる方法。子供を養育する楽しみを広くわけあうこと。みんなが直接に子供を産む必要なしに、この根本的人間経験に入れるよう、もらい子をする。生命への尊敬と女性への尊敬を更に広げて、他の生命類への尊敬を意味させること。他の生命類の多くは脅かされている。

我々自身の頭

「私はすべての生命の子である。すべての生物は兄弟姉妹、子、孫である。私の内には生まれようとしている子供がいる。新しい、より知恵に満ちた私自身である。」
愛、恋愛、男女一体——相互実現達成の車

輪と見なされるもの。赤ん坊を作ることと同様に、ここでは新しい自己、新しい生きまもの世界を創ることが重要。

変革の2

汚染

立場 汚染とは過剰な物質の生産が、その物質の吸収、変質による消滅の速度をはるかに越えるために、自然な、生成・消滅の循環が予期できない変化をこおむる状態である。

すべての有機体は余剰物、副産物を持つ。これらは全く生態循環の一部分である。エネルギーは線に沿って引き継がれ、色々な方向に屈折する。

「虹のなりたち」

これは循環である。汚染ではない。

状態 今世紀人類はゴミ、工業付随生産物、種々の化学薬品の生産、拡散が余剰になるのを黙許してきた。汚染は直接生態機構に害を与えている。それは人間性自体の環境を直接に破壊している。

目標 空気の浄化。清流の浄化。ペリカンミサゴのいる生活を。汚濁していない言葉と快い夢を。

行動

社会／政治的 ゴミや副産物の量は少なくされねばならない。DDTやその他関連する殺虫剤のちゅうちよなしの強い立法規制。ある科学者達、殺虫剤産業界、農産業界の共謀による立法化阻止を直接的に暴露すること。工業による空気、水汚染に対する厳しい刑罰。

「汚染はだれかのもうけだ。」
石油系燃料の排除。汚さない燃料の開発——太陽の力。原子燃料の排棄物について、またその脅威について本当のことを言うこと。細菌、化学戦に関するすべての研究と実験の中止。有機分解物質使用をすすめる法律、認定。街の固形ゴミをふやす紙、その他の無駄使いの禁止。街の固形ゴミの再循環の方法を考えること。再循環を根本原理として、使い捨ての考え方に導入する。

共同体 DDT、その他は使わないこと。空気汚染、車の使用を少なく。車は空気を汚す。一、二人が巨大な車にゆうゆうと乗っているのは、知性とミューズ(詩神)への冒瀆である。いっしょに乗ること。ヒットハイカーを乗せてやること。ハイウェイに沿ってヒットハイカーの待合い所を作ることに。それに——新しい世界への一歩として——もつと歩くこと。長距離徒歩旅行のために、美しい田園地方を抜ける道を見つけないこと。サンフランシスコからロスアンゼルスへ、海岸ぞいの山並を通ってゆくのがひとつ。もし田舎にいるなら、自分の出すものを肥料として利用するをおぼえること。——極東では何世紀もやってきたように。方法はあらし、安全である。

固形ゴミ 木を使い果たし、街のゴミをふやす、無駄な新聞の日曜版をボイコットすること。店で紙袋を断わること。道路や公園の清掃祭りを組織すること。ムダを出さないこと。「ひとりの僧と師があるとき山を歩いていく。川の主流に小屋があるのを見た。僧が言った。「立派な隠者が住んでいるにちがいない。」「師が言った。「何の立派な隠者なのか。菜っぱの浮いてくるの見えるだろう。ムダごとだ。」するとそのとき、ひとりの老人がひげをなびかせて丘を駆け下りてきた。安全である。」

「ひとりの僧と師があるとき山を歩いていく。川の主流に小屋があるのを見た。僧が言った。「立派な隠者が住んでいるにちがいない。」「師が言った。「何の立派な隠者なのか。菜っぱの浮いてくるの見えるだろう。ムダごとだ。」するとそのとき、ひとりの老人がひげをなびかせて丘を駆け下りてきた。安全である。」

て、流れに浮いた菜っぱを拾いあげた。」

我々自身の頭

DDTについて語る困難の一部分は、それが単に実用だけのものではないことにある。ほとんど抜き難い宗教のようなものである。西洋文化にはなにか、はいずり回り、まつわりつくものすべてを殺りくしたくなるようなものがある。毒きのこやへびに対して憎悪を感じる。これは自己内面の暗部である。自然な荒野の領域への恐れである。——それへの解答、くつろぐこと。虫やへびや、自身の気味悪い夢にかまれてくつろぐこと。

農民は収穫物の一部を、ある程度の虫の生命のために「貢納する」ことができるし、そうすべきである。ソロー(森の哲学者)は言っている。——

「そうしたら、どうして収穫がないなどといえようか。その果実が鳥たちの穀物倉である雑草の豊作をみて、私もうれしくはないだろうか。それに較べたら、収穫が農家の倉をみたすことなどはたいしたことではない。真の農夫は苦にしない。ちようどリスが、森にクルミが実ろうが実るまいがじたばたせず毎日つとめをはたし、最後のいのちの実までも放下してしまうように。」

思考、内的経験、意識の領域でも、外部の有機連鎖の世界と同様に、バランスのとれた循環と、それを狂わせる余剰とのあいだには違いがある。バランスが正常であると、心は満ちあふれる光の経験から、夢もない眠りの静けさに循環する。錬金術的な心の「遷移」。

変革の3

消費

立場 消費も同じく、バランスの問題であり、余分にもなっておき問題である。「蠅を殺す腕白坊主は、くもの敵意を感じずるように。」

状態 人間の何十種類かの、いわゆる「資源」の活用と、そのいくつかへの完全な依存(たとえば石油、石炭の化石系燃料への)は生物界のある種類の生存を奪い、それにもない他の生物の連鎖に計り知れない影響を及ぼす。また一方で主要資源の涸渇の危機に人間をさらすことになる。

未墾の地では、鳥やけものは羽根、毛皮、肥料、油の採取のためにみんな減ぼされてきている。土地は「酷使」されている。これら

はすべて戦争とか、それぞらしい消費経済の莫大な余分を養うためなのである。

目標

バランス、調和、謙譲。生きものたちの共同体のよきメンバーとなることとの真の豊饒。

行動

社会／政治的 自己革新のためのエネルギー源を発見すること。そして、考え方が定着するまでしつこく、「成長経済」はもはや健康ではなく、癌であることが知らされねばならない。

会社組織を再構成して、常に利益をあげつづける必要なしに活動できるようにすること。責任ある生産規則に力点をおくこと。

土地銀行、開放空間の創設を。国有地からの伐採の禁止。密猟者やいたずらからの完全な保護。絶対にこれ以上道路をふやさないこと。国立公園や荒地の分譲をしないこと。自動車キャンプ地を最も望ましくない場所に設けること。

無責任で不正直な商品に対して消費者ボイコット運動、消費者調査センターの振興を。このようにして、資本主義の神話と、冷戦の神話をあかすみに出すこと。とともに、共

産主義の成長、生産の神話も。

共同体

共有と大事に使うこと。ムダの排除。共同生活の適するところ——大きな道具は共有され、個人物品は個人管理に。もしも十分な人びとが一年間新しい車を買ったことを拒否するならば、アメリカ経済を永久に変えることができる。

服や道具のお古を再活用すること。(グッドウィル《善意》教、救世軍は価値がある。ただし、値段のつけ方、給料制は問題とされ、正されねばならない。)靴や服は地元職人のものを使うこと。

不用な所有物を多く持ちすぎる癖——みんなの背中に猿——を直す。しかし、快樂禁断、自己抑圧の正義漢ぶることは避ける。簡素さは軽く、呑気で、ぴしっとして、好ましい。自己処罰の禁欲トリップではない。

中国の最も偉大な詩人、杜甫は言っている。「詩人の発想は最も高貴で簡素であるべし。」鹿は撃たないこと。もしも、すべての肉を使い、食べられない部分も保存し、皮をなめし、使い、すべてを感謝の念で、筋から足の爪まで使い切ることを知らないならば、多くの人間にとっては、食事の簡素化とくつろぐばりが端緒となろう。

我々自身の頭

所有関係の複雑さが、また「所有権」「使用权」が、どんなに世界をほんとうの、明瞭な、解放されたしかたで見ることからまたげていることか、それを知りはじめることすら難かしい。かるがると地上に生きること、注意深くいきいきしていること、利己から自由でいることは、具体的な行動にはじまる。しかし、心の内の原理は直観である。我々は、たがいにもたれあつた、潜在的な知恵と共感のエネルギーの場である。まさに各人の中の高貴な心、美しい錯綜した身体、ほとんど魔術的な力を秘めた言語、に現われている通りである。

これらの潜在力、能力に対して、「より頼むもの」は何らの真理もつけ加えることはできない。

「天をふとんに、地をまくらら。」

変革の4

変容

立場

人間の自然と自己へのかかわり具合のアンバランスは、部分的には生物としての終局的な根源——生・病・老・死——

——にともなう、固有の、存在すること自体の問題である。そして部分的には文化の問題である。

有と無の問題に近づくのに、我々には知恵と、伝統と、いくつかの新興科学の助けがある。文化を変容させるには、歴史、人類学の研究を通して、哲学上の認識力を高めなければならぬ。

状態

人間の文明社会——多分、他のほとんどの生物の社会も——の最近三千年は、今のこの時点に至るまで十分うまく機能していた。しかし、もはやこれら文明社会に存続の価値はない。今や存続に對立するものである。

目標

全体的な変容に足りないどんなことも役に立たない。我々の思い描くのは、人間が、洗練され、謙虚な科学技術を用いて「自然のまま」の地上に調和し、活力に満ちて、その上に棲息する惑星である。このイメージの具体像は——

健康に、広びろと、今日より少ない人数で棲息すること。

世界部族連合とでもいったものに統一された、文化的、個人的多元主義。自然・文化的区画。欺瞞的な政治的境界でなく。

コミュニケーションと静かな交通の技術。

各地域の特性に注意深い土地使用。このようにして、高原に野牛がかえってこれるようにすること。大きな谷間の沖積地の注意深い集中的な農耕。一年のある時期に工場経営にあたるコンピュータ技術者が、残りの時期をエルク（大鹿）とともに移り住み、渡り歩く。

権力、所有希求を抑制し、いやしの唄、フルート演奏、瞑想、数学、山登り、その他本

当にこの世にあることを意味づけることとすべてへの探求、挑戦を奨励すること。

女性が全的に自由で平等であること。新しい種類の家族——責任ある、しかしもっと陽気でくれた——が当然要求される。

行動

社会/政治的

世界中に、ある種の社会的、宗教的な勢力があり、それらが歴史をつらぬいて、生態的、文化的に輝かしい事態にむかつて働きかけてきたことは明白に思われる。それらの人びとは、なお奮い立ちつづけるように——

錬金術師たち、ヒップ・マルキシストたち、アナーキストたち、第三世界諸国、カトリッ

クの異端諸派、ドルーズ教徒たち、魔女たち、道教徒たち、生物学者たち、ヨギたち、クエイカーたち、チベット人たち、禅僧たち、シヤーマンたち、スフ教徒たち、アミッシュとメノナイトの人びと、アメリカ・インディアンの人びと、ポリネシア人たち——すべての原始文化、すべての流儀の共同体、修道場運動などなど——書けば長くなる。

血なまぐさい直接的な力がかをなしとげると考えるのは実際的でなく、望ましくすらない。だから我々の行動を、絶えざる「意識革命」ととらえるのが最上であろう。それは銃によって勝ちとられるのではなく、根源的なイメージ、神話、原型、終末観、恍惚感をつかむことによって達成される。結局、ひとは変容エネルギーの側に荷担しない限り、生きつづけることに意味を見出しえないと思える。

我々の共同体

口あたりの良いマクルーハニズムにおちいらずに、メディアを使いたいものである。新しい学校、新しい授業——林を歩き、道路の清掃をする。だれも生物の事実や、それに関連した教育に無知でないように。我々の子供を自然物の間で、野性の間で育てること。

知ること。

新石器時代の初期以来、文明社会の成員で野性動物の眼の中をしかと見すえ、そこに我われ自身——同族——を見出したいと願うものは、我々が最初であることを知ること。

我々は以上のような利点をもっている。今そうであるような、明らかに徹底的に痛めつけられているという弱点を帳消しにするだけの。そして痛めつけられていることが、人間自身と宇宙の謎のいくつかに突き入る立派な契機となりうる。

さらに「人間の存続」、「生物界の存続」を超えて、我々の力の源泉を認識——物の芯には、質の差や、生死を超えた、なんらかの清浄な、喜悅のリズムがあるという体験——に依り頼む。

「存続する必要はない。」

「劫（カルバ）——ひとつの世界が創造されたから一度終末に達し、次の期間が始まるまでの期間で、四十三億二千万年」の終りの宇宙を焼き滅す炎の中で何が存続するものか。」

「虚無の中に、鉄の木に花が開く。」

何もなされる必要のないのを知ること。それが我々の動き出すところである。